

最新医療紹介

抗VEGF薬硝子体注射の適応拡大
糖尿病黄斑浮腫・網膜静脈閉塞症

眼科医長 稲本 美和子



●黄斑浮腫

黄斑は、網膜のほぼ中心にあり、視力をつかさどる細胞が多く集まっています。そのため、黄斑に浮腫を生じると、視力が低下し、日常生活に支障をきたします。糖尿病網膜症での黄斑浮腫は、単純性から増殖性のいずれの病期においても生じ得ますし、網膜静脈閉塞症でも黄斑浮腫の合併は多く見られます。それぞれの疾患自体の活動性が低下して安定した時期に入っても、黄斑浮腫だけが遷延化することもあり、患者さんにはもちろん、眼科医にとっても悩ましい状態です。

●抗VEGF薬

黄斑浮腫の発症には、眼内の血管内皮増殖因子(以下VEGF)が関与しています。抗VEGF薬は、このVEGFのはたらきを抑える作用を持ち、眼内に注射して治療を行います。加齢黄斑変性の治療薬として開発された抗VEGF薬は、近年、糖尿病黄斑浮腫や、網膜静脈閉塞症に併発した黄斑浮腫に対しても適応が拡大されました。治療間隔や回数は患者さんごとに異なり、視力や網膜断層検査(光干渉断層計：OCT)で治療効果を判定します。

●抗VEGF薬の効果

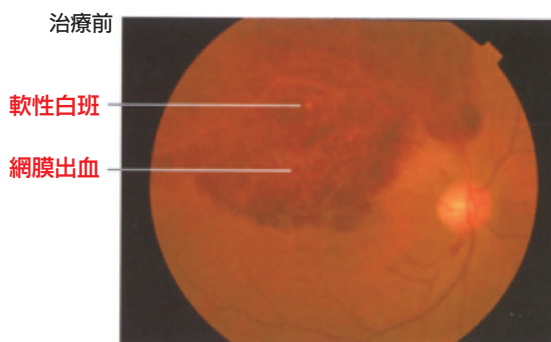
治療に対する反応、効果はさまざまで個人差があります。静脈閉塞症による黄斑浮腫のほうが、糖尿病によるものよりも浮

腫が早期に軽減しやすい印象があります。しかし、静脈閉塞による黄斑浮腫は2～3ヶ月ごとに繰り返すことが多く、再発した際に、治療を再度行います。治療に対する反応が遅い糖尿病性黄斑浮腫に対しては、月に1回の間隔で、数回以上の継続治療が推奨されています。

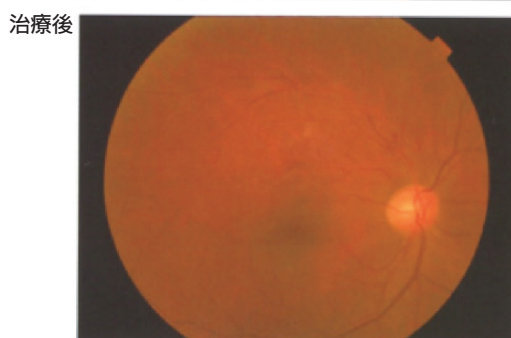
●抗VEGF薬の問題点

治療の問題は薬価が高いことです。注射1回につき、医療費3割負担の方で約5万5千円、1割負担の方で約1万2千円の費用がかかります。そのため、治療には患者さんの生活環境も関わってきます。現在の病状を患者さん本人やご家族にご理解いただき、よく相談して、治療の間隔や回数を検討していく必要があります。

以前は、糖尿病性黄斑症や、網膜静脈閉塞による黄斑浮腫を軽減させるために、手術以外の方法ではステロイドの局所治療や、レーザー治療しかありませんでした。抗VEGF薬の硝子体注射の適応拡大は、薬価が高いという問題はありますが、患者さんにとっては、治療の選択肢が増えました。治療によって視力改善があれば、日常生活の質の向上にもつながります。適応につきましては当科にご相談いただければと思います。



網膜の静脈が一部詰まって、その周辺に出血、軟性白斑がみられます。OCTでは、黄斑浮腫を認めます。



抗VEGF薬の注射により、黄斑浮腫は改善しています。

OCT：光干渉断層計
提供：参天製薬